

追悼

江川泰一郎先生を偲んで

英文法の大家、江川泰一郎先生（東京学芸大学名誉教授）が去る6月3日に永眠されました。享年87歳。

略 歴

1918年生まれ
1941年東京文理大学英文科卒
1950～51年米国コロンビア大学
大学院留学。その後、東京学芸大
学教授、同名誉教授、日本大学教
授などを歴任。



江川先生と *A NEW GUIDE to English Grammar* を偲んで

元宇都宮大学教授 塩澤 利雄

江川泰一郎先生の *A NEW GUIDE to English Grammar* は、1973年に東京書籍が高校の英語の教科書に参入したとき、全国で圧倒的に採択された英文法の教科書です。

江川先生からお話があったとき、私は友人の英文法の専門家を推薦したのですが、「学者ではなく、実際に高校生を教えている人に手伝ってもらいたい」ということでした。そして、私と田島^{きよし}穆先生（当時、東京学芸大学附属高校、後に川辺俊一先生に交替）が、それぞれ全体の目次を作るように言われました。目次が決まると、前半は私、後半は川辺先生が原稿を書くことになりました。

編集会議は、初めの2、3回は2人が書いた原稿を中心に進められましたが、いつの間にか先生が2人の原稿と会議の結果を清書してお持ちになるようになり、私たちは意見を述べるだけになってしまいました。

当時はワープロなどはない時代で、すべて手書きですから、清書は大変な仕事でした。しかも、先生の原稿は整然と楷書で書かれ、訂正は丁寧に書き直して切り貼りがありました。こうして、先生は教科書全体を5、6回は書き直されたことになったと思います。

それまでは、高校の英語の教科書は「読本」と「文法・作文」の2種があり、各学年1冊ずつ計6冊だったのが、1970年の改訂で文法教科書が独立し、3年間で1冊になったのがよかったのです。先生は学習文法の理想的な教科書を作ろうと全身全霊であたられ、文字通り一字一句江川泰一郎著の教科書を完成なさったのでした。

また、TMも先生が全部お書きになりました。当時のTMは解答中心の簡単なものでしたが、先生はTMを教師とのコミュニケーションの場として意欲的に取り組まれ、ねらいと留意点を詳しくお書きになり、好評を博し、

とくに随所にある「漫談コーナー」「楽屋ばなし」は歓迎されました。

この教科書にはいろいろな特色がありますが、編集で最も時間がかかったのは例文の選択でした。選択の基準は語学面と内容面があり、語学面は江川先生の学習文法観や指導法から決まりますが、内容面にはいくつかの観点があり、問題になると大変でした。

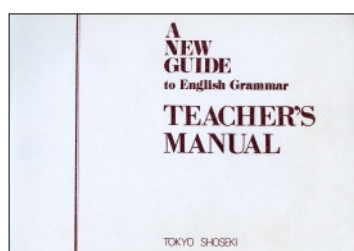
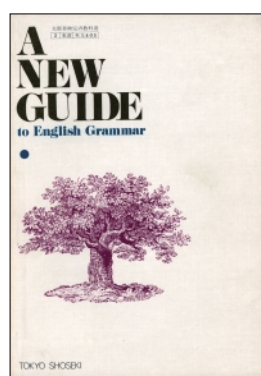
江川先生はつねに紳士的で声を荒げるようなことはありませんでしたが、例文の選択では厳しくなかなか妥協なさいませんでした。最後の編集会議は合宿でしたが、一応で上がった段階で、内容に対する疑義が出ました。生徒が身近に感じる内容か、英語の先生に女性が増えていことに配慮したか。検討し直すために、帰京を延期しました。

発行後、私が「例文が豊富で新鮮だ」と自慢したところ、友人に「いや、陳腐な例文が結構ある」と言われ、調べると意図的に残した伝統的な文法の例文を除いても、かなりつまらない例文がありました。そこで、改訂のときに、それを70文くらい選んで先生にお渡ししました。先生は何もおっしゃいませんでしたが、次の会議でそれに約30の文を加えて、その代わりに例文をお出しになりました。しかし、どうしても適当な代案が出ないものが10文ほど残ってしまいました。すると、それだけのためにもう1度集まることになりました。先生がたくさん代案を出されるので、私たちは大変で、次の会に2人で200近い例文を用意しました。「例文のひとつひとつに執念がこもっている」と先生はおっしゃっていました。これが類まれないわば職人芸で実り、江川学習文法が生まれ、育ったのだと思います。

また、先生は「教科書と辞書はやらないほうがよい」とお話しになっていましたが、この教科書に対するご熱意は大変なものでした。日本の英語教育のための学習文法の提案は、先生の従来からのご主張であり、教科書の形での具体化であったからであると思います。教科書というのは格別の重みがあるものです。最も採用された昭和51年度本は、文法履修の高校生の36.5%、349,833人、

そして毎年3人に1人以上の高校生がこの教科書を3年間も勉強するようになることは、著者にはこの上ない喜びと責任を感じさせるものでした。

この教科書が制度上から11年でなくなってしまったのは残念です。しかし、高校の英文法の教科書が消えても、英文法を教えることは必要であり、江川先生の『英文法解説』（金子書房）は初版が発行されてから半世紀以上にもなるのに、今なお版を重ね洛陽の紙価を高めているのは喜ばしい限りです。江川先生は学校文法と科学文法を結びつけ学習文法を確立した功労者として、日本の英語教育史にその名を永く残されることと思います。



▲ TEACHER'S MANUAL 表紙

◀ A NEW GUIDE to English Grammar 表紙

恩師 江川泰一郎先生

東京都立農林高等学校 中本 利信

私が江川泰一郎先生をはじめて知ったのは、高校2年生のときにテレビを通してでした。地方都市の高校生だった私にとって、その当時はネイティブの英語を聞けるのはNHKのラジオとテレビの英語番組くらいしかありませんでした。江川先生はNHKの教育テレビで英会話上級番組を、アメリカ人の大学教授と2人で担当していらっしゃいました。そのころの私にはレベルの高すぎる内容でしたが、毎週一生懸命見たものでした。先生のよく通る声と先生が話される歯切れのいい英語がとても印象的でした。高校3年生になると、私は旺文社の大学受験ラジオ講座を聞きはじめました。そこでも、私は江川先生が担当された英文解釈の講義の熱心なリスナーでした。

私が江川先生に直接お会いしたのは、それから4年後でした。大学3年生のときに近所の塾で英語を教えるアルバイトを始めた私は、いつの間にか英語の教師になろうと思うようになっていました。しかし、大学では商学

部で、本格的な英語の勉強はしていませんでしたので、どこかの大学院で英語教育の勉強をしようと思い、江川先生がいらっしゃった東京学芸大学を選んだのでした。面接試験ではじめてお会いした先生は私には輝いて見えました。一見気難しい学者のようにも見えましたが、先生の目は優しくそうに私に微笑みかけているように感じました。

江川先生の研究室での少人数の授業は、大学院の授業にもかかわらず、テキストを一人一人音読させられ、細かい発音やアクセントの違いまで注意されました。それより10年前にも学部で先生の授業を受けた経験があったクラスメートは、それでも先生が優しくなったと驚いていました。もっと若いころの先生は、学生が英語を正確に読めなかったりすると、「味噌汁で顔を洗って出直して来い」というのが口癖だったそうです。授業は厳しかったのですが、野球好きだった先生は昼休みに大学院の学生たちと軟式野球をして遊んだりすることもありました。

私が大学院1年生のときの1月中旬、大学院生たちが先生のお宅に遊びに行きました。葛飾区にある先生のお宅には古い蔵があり、その中に先生の蔵書が並んでいました。私が高校3年生のときに聞いた大学受験ラジオ講座のテキストも大切に保存されていました。2階に先生の書斎があり、仕事がしやすそうな長い机がありました。夕方、みんなでおしゃべりをしているときに、先生がテレビをつけると、東大の安田講堂占拠の様相が実況中継されていました。そのテレビの画面を先生も私たちも食い入るように見つめたことを覚えています。

私が結婚したときには江川先生ご夫妻に仲人をお願いしました。私の妻の実家であるお寺の本堂での仏式の結婚式だったのですが、畳の上での長時間の式が終わって立ち上がろうとしたときに、先生はそのままバタンと倒れてしまいました。教え子の結婚式なので義理堅くきちんと正座されていたのですが、今でも本当に申し訳なかったと思っています。

私は江川先生から何度もお葉書をいただいたことがありますが、いつも先生はブルーのインクで実に几帳面な文字で書いていらっしゃいました。文字を真っ直ぐに書けるように先生の葉書には薄く線が引かれてました。ご退職後のいつか電話で私に「毎日、将棋三昧だよ。英語なんか忘れちゃったよ」と冗談っぽくおっしゃったことがありました。気取らない下町っ子の江川先生らしいと私は感じたものでした。

江川泰一郎先生を偲んで

寺下 敦敏

(東京書籍株式会社非常勤顧問)

江川先生と私との関わりは、昭和48年施行の「学習指導要領」により高等学校英語に「文法」が導入され、東京書籍発刊の教科書の監修者（代表著作者）を先生にお願いすることになり、私がその編集を担当することになってからです。編集の始まりから約13年間、編集者として親しく、かつ厳しく先生にご指導していただきました。ここに、先生への追悼の思いを込めて、その間のことを思いつくままに綴ってみたいと思います。

まず先生のお人柄ですが、いい意味での江戸っ子気質まる出しという感じでした。たいへんきっぷがよくて、頑固で職人気質のいっぽう、茶目っ気があって、さばけた、気さくな性格でした。これは、東京の下町、葛飾四つ木に代々続いた質屋の長男としてお生まれになり、お父上の地をそのまま引き継いだものと思われます。

「文法」教科書の監修者としてお願いするときに、「引き受けるからには、内容から販売からすべて私が責任をとるから、自分の思いどおりにやらせてほしい」と堅く約束をさせられました。編集がスタートしてからは、先生が大見得をきられたとおり、先生のこの仕事にかけの情熱と責任感は生半可なものではありませんでした。

教科書編集ではふつう、編集委員である高校あるいは大学の先生が原稿執筆を担当し、代表著作者はそれを加筆修正したりするのですが、この教科書の場合はまったく逆で、解説・例文すべて監修者である江川先生が執筆し、ほかの先生がたはそれにいろいろ口出しするといった形でした。

教科書の例文については編集者も印刷工場の営業担当者もずいぶん泣かされました。というのは、先生の例文への入れ込みようは尋常ではなかったのです。先生の持論として、「文法の例文は単に文法のための例文であってはならない。例文に含まれる語彙や表現等を覚えて意味のあるものでなくてはならないし、また、例文の表す場面が自然で、かつ読解にも作文にも役だつものでなくてはならない」という考えでした。それゆえ、例文の選定・作成は工場下ろしぎりぎり、いや初校・再校、あげくの果ては責了のあとまで粘り、いい例文が浮かべば真夜中でも「いい例文ができた。あれと代えて」といった

電話が何度もかかってきて、そのたびに工場の担当者に伝えと、またかということでさんざん文句を言われました。そういうことでしたから、編集過程において私もが少しでも手を抜こうものなら、それこそ大声で厳しく叱咤されました。

例文ばかりでなく、文法事項の扱いについても、先生は独自の考え方による簡潔・明快な解説を取り入れました。特に、**would** と **used to**, 比較級の **less**, 仮定法, 準動詞, 無生物主語, 名詞構文などにその例が見られます。その中で、真偽のほどは定かではありませんが、「**S+V+動名詞**」の構文では「頭がメガフェップスの動詞には動名詞を続ける」と覚えるとよいと唱えたのは、江川先生だと聞いたことがあります。メガフェップスとは、**M**(mind, miss), **escape**, **give up**, **a**(avoid, admit), **finish**, **enjoy**, **p**(practice, put off), **stop**—Megafeps のことです。

この教科書(*A NEW GUIDE to English Grammar*)の **TEACHER'S MANUAL** も教科書のときと同じように、先生は約200ページを1人ですべて手書きで執筆されました。この **MANUAL** を企画する際に、どういう形がいちばん使いやすいかといろいろ話し合った結果、当時としてはたいへんユニークな体裁を採用しました。つまり、A5判横綴じ、見開き2ページ構成にして、左ページの左半分は教科書の縮刷版、右半分は例文の日本語訳(**Exercises** の場合はその解答)、右ページは解説を記載するというふうに。また、その内容も要点を得ていて、現場の先生がたにわかりやすく、構成ともども好評でした。なかでも、「漫談コーナー」と「楽屋ばなし」というコラム欄が随所に設けられ、編集過程におけるこぼれ話や英文法にまつわるおもしろいエピソードが盛り込まれたことは特に評判となりました。そのため発行後、教科書を採用しなかった学校の先生からは **MANUAL** だけほしいという要望が多くありました。

このように編集された *A NEW GUIDE to English Grammar* の採択は、11年間（「文法」教科書発刊から次の指導要領により消えるまで）毎年2位以下に大差をつけて首位を保持しました。20種発行された「文法」教科書の中で、一時は約40%のシェアを占めました。先生は江戸っ子のせいか野球は巨人ファンでしたが、その巨人の9連覇を凌いだと鼻高々でした。ただし、当時の江川投手の「空白の一日」事件は、「江川という同じ姓でありながら、あんな汚いことはしてはいけない」と悲憤慷慨していました。

ところで、江川先生の趣味といえば野球と将棋が有名で、野球のほうは東京学芸大時代には暇をみては学生とソフトボールに興じられていたということです。また、将棋は実力はアマ3段くらいでしたが、運よくと言いますか、当時の英語編集部長の将棋の実力も年齢も同じくらいで、両者とも負けず嫌い、仕事にかこつけてよく先生のご自宅で対戦をしたものでした。特に、先生は負けるのが癪らしく、負けるとあと何番と言って勝つか対戦成績がとんとんになるまで、真夜中まで延々と続いたもので、私は立会い人のような形でよくつき合わされたものでした。その編集部長が今年の5月23日に死去、奇しくもその10日後に先生が亡くなられたというのも、不思議な因縁と言いましょうか。

以上、まとまりもなく書き連ねましたが、先生の思い出は尽きません。先生から見れば、私はほんの若輩でし

江川泰一郎先生の主な著作一覧

〔著書〕

英文法解説 1953 金子書房

代名詞―「英文法シリーズ」第4巻 1955 研究社
語学的指導の基礎(上) 教室：英語の文法

―「英語ハンドブックス」第2巻 1959 研究社
名詞・代名詞の用法

―「教室英文法シリーズ」第1巻 1961 研究社
冠詞・形容詞・副詞の用法

―「教室英文法シリーズ」第2巻 1961 研究社
英語の文法―「現代英語教育講座」6 1965 研究社
文の転換―「英語の語法表現編」第11巻 1968 研究社

〔翻訳〕

英語構造の基本問題

―(英語教育シリーズ12) 1959 大修館

実例英文法 1973 研究社

§ 149の第1例のLove is the feeling **that** you feel when you are going to feel a feeling **that** you never felt before. について、ある現場の先生から「内容をとやかく言うわけではないが、高校生にこの文の意味が読みとれますか」といわれた。私としては、それこそフィーリングで読んでもらいたいと思う。(楽屋ばなし)

たが、一人前のように扱ってくださり、ずいぶんかわいがっていただきました。私としては、先生に気持ちよく思いどおりに仕事をしていただけるように、言われたことを適確に処理したり環境条件を整えたりと、その点ではたいへん気苦労を重ねましたが(事実、いったん先生の機嫌を損ねると、その修復にかなりの期日を要することが何回もあり、その体験は身にしました)、本来の編集の仕事の面ではずいぶん楽をさせていただいたと思います。とにかく、約40年にわたって編集者として多くの先生がたとおつき合いさせていただいた中で、江川先生は男子一生、仕事にかける情熱と責任感の大切さを厳しく教えられたお一人でした。

最後になりますが、先生から生前に賜りましたご指導ご鞭撻に改めまして深謝申しあげるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたす次第です。合掌。

これは私のむすこから聞いた話である。むすこの高校時代の英語の先生は § 69(2) c) の *Who that has pride can stand such an insult?* の *that* を教えるのに、次のように言ったそうである。

「もし *who* を使うと、*Who who has pride ...?* となるね。2フー(2歩)がいけないのは、英語も将棋も同じだ」(漫談コーナー)

§ 94(1)の *You shall* が日常語として、小さい子どもに対する場合のほかに、ペット(pets)に対して使われることもある。そのことを指摘して次の文をあげているのが Geoffrey N. Leech (*Meaning and the English Verb*, p.81) である。なるほど、動物に対してなら、失礼ということはあるまい。

Good dog, you shall have a bone when we get home.

(おりこうさんだね。家に帰ったらごほうびの骨をあげよう。)[文頭の *Good dog* に注意]

なお、この Leech の本(わずか130ページ)は英語教師には最適の読みやすい本なので、ぜひ一読を勧めたい。(漫談コーナー)

§ 94(1)=If you are a good boy, you *shall* have a nice toy. (幼児に対して)

(A NEW GUIDE to English Grammar

TEACHER'S MANUAL より抜粋)

漫談コーナー：先生がたを対象にした文法漫談

楽屋ばなし：教科書作成過程における裏ばなし